

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和4(2022)年
2月号

通巻618号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 令和4年2月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷 監修
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



ドキュメンタリー映画「NAGASHIMA～“かくり”の証言～」の一場面 岡山市 宮崎賢氏撮影(文・5頁)

昭和42(1967)年2月23日 申孝祭法話より

申孝祭の意義 — 「和」の記念日 —

法主 矢追日聖 (満55歳)

二つの重要な記念日

今日は申孝祭でございますが、お祭の意義は皆さんも分かってくれていると思います。これはどうも面白いのですが、十二月四日の金鶏祭と、年が明けて二月二十三日の申孝祭、この間に一年間の大倭の動きが具体的に大体表れてくるんですね。それで大倭としては毎年今日で、ひとつの節になっておるのです。

言い伝えにある金の鶏が飛んだ日、これを新暦に直すと十二月四日になるらしいんです。申孝祭は、神武天皇が鳥見の山中において御親祭(※天皇自らお祭りをされること)をなさったという日なのですが、これも新暦に直すと二月二十三日になるらしい。そして昔は紀元節と申しておりましたが、二月十一日(※神武天皇が即位した日)が今年から日本の建国記念日に決定されて、国民全体が何かの形でお祝いすることになりました。

この建国記念日については、ラジオ・テレビ・新聞雑誌などで賛成、反対の意見がたくさんあるのはご存知でしょう。今日の申孝祭も、それとある程度関連のある記念日なのでございます。

毎年、大倭の宗教的祭典行事として、十二月四日の金鶏祭と二月二十三日の申孝祭を繰り返してきておりますが、これは日本の民族信仰の立場において、非常に重大な意義のある記念日だと思っております。しかし全国の神社・神道で取り上げて祭典行事をやっておるところはあまり

ありません。

この二つの記念日は一応、歴史に基づいているようですが、実はこれらは日本人の信仰の世界において生きている事柄であって、科学的根拠・裏付けを言いつくせば何一つ決定的なものが出てこないのです。その点は、今色々問題になっている建国記念日でも同じことなんです。

日本人が毎年十二月二十五日はクリスマスだと言っていて、飲んだり踊ったりするのもおかしくないんですけど、これは習慣づけた伝説的な日だと思っただけで、それと似たようなことで、二つの記念日にも百人が百人認める根拠はあり得ません。けれど、よその国の人には通用しない話ですが、およそ日本に生まれ先祖から血を引いておる日本人であれば、今日の申孝祭も信じる信じないの問題ではなく、我々の心の中に生きていなきゃいけない。理屈の世界ではないのです。

『古事記』『日本書紀』をどう捉えるか

これらの日が記録されたのは今から約千三百年前です。祖先たちが日本の国の流れとして伝説・神話、あるいは歴史的な事実も含めて『古事記』『日本書紀』に文章として残してくれた。これは世界的に見てもかなり古い記録だと思います。そのように祖先が記してくれた記録という記録を、本当だ嘘だと論じるのはおかしいんですね。これは日本人としてひとつの信仰なのです。

例えば仏教の経典を読めば、実に荒唐無稽なことがたくさん出ています。『法華経』にも釈尊が説法をしていると、後ろに大きな多宝塔が現れ、中から多宝如来が出てきて、釈尊の教えは真実だと証明したとか、お釈迦様の眉間の白毫相から出

る光が東方一万余八千の国を照らすとかね、科学的に見ればそんなはずはないんです。けれども釈尊の教え・宇宙の真理・仏教の教えを信じる者にしてみれば、それらは疑うものではないし、否定する根拠もないのです。

そのように現代人の考えで言えば、二月十一日の神武天皇が即位式もあつたんか、なかつたんか、分らない。あるいは二月二十三日に神武天皇自らが鳥見の山で皇祖天神をお祭りされたのも、ウソかホンマか、これも分からない。結局、万人が認める科学的裏付けをもつて起こった事を証明は出来ないと思う。

けれども仏教経典にあるように、八歳の竜体の女子が男子に変わったとか、千手観音みたいに背中からたくさんの手が出てるとか、まあそんなものがあれば化け物なんですけど、けれどもこれは理の表れであって、仏教を信じる人にとつてはどれもこれも尊いものなんですよ。

それと同じことで千三百年も前に我々のご先祖が『古事記』『日本書紀』に記してくれた、その悠久の昔から奈良朝までの流れを、歴史とか科学の裏付けとかそんなんじゃないに、仏教信者が経典を信じるように、日本民族であれば真偽を問わず受け入れるべきで、これが我々の取るべき正しき態度だと思ふのです。

日本人の先祖が生きてきた精神的なものとその流れが、記紀には含まれていて記録されているのだから、事実はどうでもよいのです。神武天皇がおろうとおるまいと、そんなことは我々には問題じゃなく、『古事記』『日本書紀』を日本の宗教の世界における経典として見るべきなのです。だから金の鶏が飛んだと書かれていれば、飛んだと信じればいいのです。それを否定する根拠もどこにもないのだから。

日本の建国と

神武天皇即位は関係ない

二月十一日は神武天皇が即位された日に当たらない。そしてその四年後にはようやく大和の国が平和に治まったという。これは元の大倭の神さたちの力によるものだと、神武天皇は金鶏発祥の鳥見の山に出て来られ、自ら感謝のお祭りをされた、それが今日二月二十三日の記念日なのです。日本精神から言えば宗教的・教育的、色々な意味で一番尊い日だと思います。

現代人の歴史感覚から見れば、九州からやって来た神武天皇が倭の国を討伐して覇者・権力者になって即位の式を挙げて王座についたと考えるでしょう。しかし神武天皇が即位されたことと日本の建国とは何ら関係はないのです。

日本の国はいついつ出来たというはつきりした始まりはないのです。天照大神のご神勅に「瑞穂の国は天壤(※あめつち)と窮まり無し」とあると、千三百年前の先祖さんたちも言っているのです。奈良時代の言葉で書かれていますけど、既にその時代からこの国は、始めなし終わりなしだと認識されていたということです。

このように日本の建国がいつとは分からないけれどいつかは出来たんだね。だから、せめて建国を記念して祝う日を作るのは結構なことですよ。いつ国が出来たかと、国が出来たことを祝うとは意味が違ふんですよ。そしてその祝う日を神武天皇の即位の日を持っていったわけです。

橿原神宮では神武天皇をお祀りしているので、いろいろなお祭りをする(とはいいいことなんです。けれど橿原市という自治体が行事をするのは行き過ぎていると思うし、反対派を刺激するのも

当たり前だと思えます。ご祭神である神武天皇や皇后の媛蹈鞰五十鈴媛に扮し、公衆の面前で街中を練り歩き見世物になるのは非常に不敬だと思う。何ら神武天皇を崇敬していないことになる。これを橿原神宮の宮司が黙認しているのでしょうか、もし私が神武天皇を祀っているのであれば、そのような不敬なことは出来ないし、その霊に対して申し訳なく済まなく思っています。けれど今の時代はこんなことを平気でしてしまうのです。だから建国の記念日と紀元節を一緒にしてものを考えるような錯覚をします。

建国の記念日をいつにするのか

私の考えでは、建国の記念日は神武天皇が即位した日、つまり現代人が、一人の主権者が生まれたと見るような二月十一日ではなくて、神武天皇が何らかの行事をした日にするのがいい。

それは九州から来た者も、倭におった者も穏やかに一つになって、新しい国の発足・転換期になった二月二十三日だと思っただけです。政治的・権力的な意味がなく宗教的・教育的・道徳的な意味がある今日のような大らかな日、意味深い日を持つてくるのがいいと思うのです。

二月十一日は神武天皇が即位の式を挙げた日というだけで、大倭では大した意味はありません。それよりも二月四日、金の鶏が出た日に意味があります。

九州と倭との第一回目の激戦が生駒山の西の下であったのですが、鎧袖一触(※たやすく打ち負かすこと)、九州側は敗走して、今度は熊野に回って再び倭に入ってくる。この第二回目の鳥見の戦いは『日本書紀』にも「連に戦ひて取勝つこと能はず」とはつきり書いてあるように九州側

は連戦連敗、それほど倭は強かったのです。

ところが、もうにっちもさっちもいかん、どうしようもないこの時に、天俄かに掻き曇って怪しき鶏が出てきて光り輝いたとあり、その後はどちらが勝ちどちらが負けたとは書かれていない。

九州側がもう負けるという時に、大倭の聖歌にありますように和の光が現れた。それが鶏であれ雷であれ、敗れて息絶える寸前に救いの神が出てきたのです。学者は金の鶏を色々なぞらえて言いますが、何にしてもこれは救いの神なのです。金の鶏が出て両軍が戈を収めたのです。

倭にも九州にも大王、即ちスメラミコトが居られて、言い伝えによれば倭は饒速日尊の、九州は瓊瓊杵尊の、どちらも天孫の筋に当たるとあります。私は宗教的立場から同じ系統として見ておりまして、倭は兄の筋、九州は弟の筋で同族の戦いだったのですね。

そこへ金の鶏の奇跡が起きたので両軍は戦いを止めて話し合い、互いに天孫の印物を見合合ったのです。倭側からは天の羽羽矢と歩鞠を示したところ、九州側は「事不慮なりけり」と言って高千穂伝来の天表を出したと『日本書紀』には記されています。

この倭と九州の戦いを歴史として扱い、倭は賊軍であって、九州からこれを討伐にやって来て制覇した神武天皇が、第一代天皇に付いたと解釈する人たちがいる。しかしそれは大いなる錯覚であって、そんな人たちはいつたい『日本書紀』をどう読んでいるのかと思うのです。九州側が倭の印物を「事不慮なりけり」と言っているのであればどっちも対等であって、どちらが賊軍でどちらが皇軍と言うのではありません。まあ同じ筋の者が知らんと喧嘩したことになるんですよ。

私たちの先祖が千三百年も前に記録してくれた

のだから、古い昔のことは歴史的な裏付けがあるうとなかるうと、詮索しないでずっと受け取ればいいんです、昔からの言い伝えはこうだと教えればいいのです。

同族同士がそうとは知らんと戦ったけれど、結局は親である倭の家に九州から神武天皇が帰って、その家の娘さんである媛蹈鞰五十鈴媛を皇后に立てられた。つまり大倭に婿養子に入られて、その結果として神武天皇が第一代の天皇になられたんですね。そうして二月十一日には即位の式を挙げられたということになっておるんです。

新聞などを見ますと、建国記念日を教育者がどう教えるのが議論されていますが、建国の日と神武天皇のご即位の日とは何ら関係ありません。二つを結び付けるから、右翼がはびこるだけの余計なことに疑心暗鬼して、世の中が騒ぐのです。

我々から見れば倭には、すでに神武天皇以前より饒速日尊から代々続くスメラミコトとして長曾根日子命が居られたのであって、なにも神武天皇が倭に来てから日本の国が始まったわけではありません。けれども国が二月十一日を建国記念日と決めたのであれば、その日に建国を祝い、ご即位の日としては橿原神宮が何かの行事をされたらいいと思います。

「和」といって何が日本精神の根源

大倭において十二月四日と二月二十三日は芽出度く結構な日であると同時に、大倭教団としてもひとつの節にあたります。昨夜も家の者が集まり、そのようなことについて教修会(※毎月二十一日夜に行われていた臣人の集まり)をしておりました。話に花が咲いて三時になってしまいました。流煎じ詰めれば日本の神話や言い伝えに一貫して流

れているのは「和」ということだと思っんです。このことは聖徳太子の時にはつきりと打ち出されておるんですね。十七条の憲法の第一条には「和を以て貴しと為し」とありまして日本精神の根源だと思っんです。

けれど「和」ということが聖徳太子から始まったというのでありません。金の鴉の神秘的な力によって九州・倭両軍が戈を収め、話し合って双方から天皇・皇后を立て、一体となった新しい「大和」が発出したこと、これこそが本当の和の精神の具現なのです。たとえこの出来事が伝説でも架空のことでも構わない。けれど起きたその事の裏には日本の和の精神があるので。九州と倭が大団結して一つになったのですから。

いつも私は、神ながらの頭幽一体、相對即一体などと、一体論をやかましく言いますが、大いに和していく、これが先祖から伝わった日本人の根本精神ではないかと思っんです。大いに和するということ、「大和IIやまと」と読ませています。漢字で書いてそうは読めませんが、日本の国の始まりから今日に至るまで、我々日本人の精神の裏に流れる源流です。すべては大いに和す、仲良くすることに帰一すると思っんです。

『日本書紀』に神武天皇が靈時(※まつりのにわ)を鳥見山中に立てて、皇祖天神に対して「大孝を申べ給う」、つまり「大倭のご先祖さんたちに感謝のお祭りをされた」(※平成29年「おおやまと」2月号参照)と書いてますので、「申孝祭」として居るのです。そういう意味のある日ですから、日本人の根本精神である、仲良く和すことを皆さんもよく理解してほしい。難しい哲学は必要ない。「みんな仲良く行こう」を二月二十三日という記念日の土産として自分の気持ちの中に納めてほしいと思っんです。

(文責・編集部)

波紋

「タニマチ」の人

大阪府枚方市 林 修三

突然ですが、皆さんは薄恕一さんという方のお前に覚えがおりでしょうか？

昨年の年の暮、夕方にいつもよく見る関西テレビのニュース番組を見ている時でした。「兵動大樹の今昔さんぽ」という私も好きなコーナーの中で、お会いした事がないはずなのに、何故か心なつかしい、初老の口ヒゲをはやし、眼鏡をかけた凛としたお姿の紳士の写真があらわれまして。お名前を薄恕一氏と言われ、番組を注視すると、相撲界で力士を応援する人としてよく使われる「谷町」という名の語源となった方でした。

「薄恕一!? 聞いた事があるなあ。あつ! そうか、あの法主さんが恩人として語られている……」と瞬間的に思い出す事ができました。法主のお書きになった昭和24年4月発行の『大倭』第7号から、その部分を引用してみます。(※『やわらぎの黙示』所収77〜78頁)

《この日、神の使いか大阪布施の日新商業の願書締切りだと、親族の矢追芳太郎訓導が走ってくれた。間一髪、願書は受け付けてくれた。試験当日、体格検査はやはり不合格だった。だが本校設立者の一人、薄恕一医師にその事情を父は真剣に語られた。薄氏は微笑して「これでは官立や公立は採らんだらう。学科の方は知らん、校長探つてやつてくれ」と言われたので、ほんとうに蘇生した気がした。なお意外だったのは、書記さんだと思つていたのが何ぞ知らん、鹿島浩校長だったのである。

こうして日聖は中等教育を受ける資格を得たの

である。日聖は終生この大恩を受けた小学訓導、医師、校長の三氏を忘るることはできない。常に思い浮かべて感謝の祈りを捧げている。《この薄氏とはどんな方なのか? ネット等で調べてみると……》

慶応2年(1866年)福岡県糟屋郡席内町にお生まれになった医師で、明治22年大阪谷町に薄病院を開業されている。氏は大の相撲好きで、病院内の中庭に土俵をこしらえ力士にけいこさせたり、幕下力士を無料で診療したりして、力士を愛し応援されていたので、力士は「タニマチ」と言つて慕つたようです。又、一般の患者に対して「貧乏人は無料、生活できる人は薬代1日4銭、金持ちは2倍でも3倍でも払つてくれ」というやり方を貫いた方でした。他の逸話として、直木賞の直木三十五も、小さい時からこの方にお世話になり、成長してからは薄病院でアルバイトをしていたとの事。さらに直木の自叙伝『死までを語る』にも「43才まで生きてこられたのは、この先生のおかげである」とまで書かれています。

薄氏がそんな人格者であり、有名な「谷町」の語源のもとになった方であろうとは……。驚くと同時に、まことに神の織りなす人生の綾を感じます。法主の「神の使い」とも言われる3人の方のお一人は、かくも立派な人生を歩まれた高潔無比な方でした。今さらながら法主の辿られた人生の中で、縁を得た数多くの人々の生き方に興味ができます。

とにかくも、今回ご紹介した薄氏には「さすが法主の恩人!」という様な何か誇らしい思いが湧いてきます。この思い、皆様とも是非分かちあいたく、筆を取つた次第です。

世の中はおもしろい。いや、すばらしい!

ドキュメンタリー映画

「NAGASHIMA」がくり「の証言」遂に完成

「NAGASHIMA」がくり「の証言」製作実行委員会 矢部 顕

●映画冒頭のシーン

濃い青色の未明の海と崩れ落ちた患者収容桟橋
 (ナレーション)
 波ひとつありません。浮かんでいると本土まで
 運んでくれそうな海なのですが、屈いでも隔
 ての海です。

今まで誰にも話さなかった。この桟橋から、島
 にあげられたときのことを。顔を出さなかった、
 家族に迷惑がかかるから。

でも、もう時間が残っていません。あなたにだ
 けは知っていてほしい。あなたに真実を託します。

●ドキュメンタリー映画の完成

みなさまからドキュメンタリー映画製作にたく
 さんの協賛金をいただきましたことにあらためて
 感謝申し上げます。おかげさまで、ハンセン病ド
 キュメンタリー映画「NAGASHIMA」が
 くり「の証言」が遂に完成しました。30人の入
 所者の証言を集めて、長島愛生園の四季と織り交
 ぜた構成になっています。証言に加えて、コロナ
 禍のさなかではありましたが、菊池恵風園と草津
 の重監房資料館を取材して、新たな歴史的事実の
 発見もありました。上映時間は1時間50分です。
 現在は、日本におけるハンセン病の1000年
 を超す長い歴史(光明皇后の時代から? そうい
 えば光明皇后がハンセン病患者を洗ってあげたと
 いわれる浴室へからぶる)の建物がある奈良の法
 華寺に宮崎監督を案内したことを思い出します。

また、思い出しました、交流の家まじわりのいえの建設当初から
 法華寺の先代久我高照門跡にご協力いただいたこ
 とも……)の最後の最後の局面です。最後の証言
 集となることでしょうか。みなさん高齢で、証言で
 きる人の最後です。今後はもう不可能でしょう
 (証言していただいた方のうちで7名の方はすで
 にお亡くなりになっています)。

今回、証言の記録が可能になったのは、宮崎
 賢さんという報道カメラマンなくては語れませ
 ん。カメラに顔を向けて語ることは、ハンセン病
 の病歴者にとっては今までに無いことですが、そ
 れが可能になったのは、長年のお付き合いの中で
 生まれた、証言者の宮崎さんに対する信頼にほか
 なりません。証言者のことばの奥に長年築いてき
 た信頼関係を読み取ることが出来ます。40年間に
 わたつての150を超えるニュース特集の取材、
 13のドキュメンタリー番組の制作という実績だけ
 でなく、宮崎さんのご人徳があつてこそ実現でき
 たことと思います。

●あらためて、撮影・取材・編集・構成
 担当の宮崎賢氏を紹介します

宮崎賢さんは、ハンセン病問題に関する取材歴
 は40年に及び、その間、岡山県の長島愛生園・邑
 久光明園をはじめ10か所の国立ハンセン病療養所
 や、「らい菌」の発見者であるアルマウエル・ハ
 ンセン医師が生まれたノルウエーのベルゲンやイ
 ンドを訪れ、内外のハンセン病政策や現状を取材
 してきました。

TBS報道特集、筑紫哲世の『ニュース23』な

どで全国に発信されたこともあります。

この間、1983年「地方の時代」映像祭で大
 賞。2014年放送人グランプリ特別賞。第43回
 放送文化基金賞・個人賞。日本民間放送連盟賞優
 賞4度受賞。2019年報道活動部門(ハンセン
 病)でギャラクシー大賞などの放送賞多数受賞。
 大倭会館で行われた「交流の家運動50周年記念
 の会」を取材したニュース特集もあります。F
 IWC主催ハンセン病フォーラム「それでも人生に
 イエス、か?」にも映像で出演していただきました。
 大倭会とF IWC共催の文化講演会でお呼び
 したこともあります。

●今後に向けて、みなさまへのお願い

2021年10月15日、日本弁護士連合会人権擁
 護大会(於:岡山)で上映会がありました。
 コロナ禍が落ち着かないと難しいと思いますが
 が、今後は全国各地で自主上映会を開催してい
 ただける方やグループを募っています。

表紙写真について

洋画家・清志初男の制作風景。輸送船の船員と
 して南方戦線に赴き、戦後1946年に長島愛生
 園に入所。絵は独学で始め、長年元患者であるこ
 とは公にせず、新世紀美術展など国内の公募展で
 活躍。2003年にはフランスとスペインの芸術
 勲章を受章。没年2020年、93歳で。

兵庫県加西市の北条石仏(五百羅漢)との出合
 いがきっかけで、「石仏の画家」として知られる。
 石仏の顔は、ニューギニアで目の当たりにした飢
 えに苦しむ日本兵や、夜の街のスナックで働く女
 性、愛生園で出会った人々、そんな人たちの顔を
 描いていると語ったとのこと。

(※新聞記事・ネットを参考に、編集部)

矢追隆家（法主満31歳）の頃 祖母を思う

—昭和十八年五月十日日記

……前略……

今日は祖母の命日である（※キシ 大正8年5月10日逝去）。縁側に座って西方遙か故郷の山河を思ひ、祖母の御霊に合掌した。庭には大久保の名残りを止めたその名も高き躑躅が今を盛りと咲き揃っている。一枝が優しく動いた。風も無いのに、何だか祖母が側へ来たように感じた。幻の在りし日の気高き姿が幾度となく消えてはまた目前に顕われてくる。



祖母 キシ

「おばあさん、有難う、隆家は健在で祖母の遺業を受継ぐ事が出来ました。思えば祖母は三十有余年、世間の人から狂人と云われながらも、よく臨終の時まで一貫した信念を通されました。その不動の精神が今日の隆家を生んでくれました。私も何回となく大倭の片田舎の農夫となって、土に生き、土に死し、善良なる家庭人となって、家族の幸福のために一生を暮そうと決心しました。しかし運命はそれを許してくれませんでした。隆家も同じく狂人の道を辿るようになりました。

時代の流れは有難いもので、春に花の咲くが如くに、祖母の大使命は両親を経て今や完成の暁を迎えんとしております。最後の仕上げは隆家が承りました。もし隆家、事中途にして薨る事がありましては長子家麻呂が必ずその後を継いでくれます。御安心下さい」

私は幼少の頃、泣き男と云われる程よく泣いたのである。それがために人から馬鹿にされてからかわれたものだ。その度毎に私を最も擁護してくれたのは祖母であった。

「アホアホと云わないで、十五才まで待つておくれ、お国の大事な仕事をする人間になるのだから」。この言葉が今でも私の耳に残っている。当時は私のようなものでも果して祖母の言われるが如く偉い人間になれるのかしらと思いついたように考えたものだった。

泣き男のくせに悪戯は一人前以上やる。強情な事は子供なみではなかった。この点で母には数知れず迷惑もかけ、手足を縛られて米蔵へ入れられる事が日に一度は必ずあったのである。随分怖いお母さんだと、怒った顔を見るだけでも泣いた事を記憶している。母も祖母の氣に添うようと、何でも私を出世させるために美に敵し躰をされた事が十四、五の時分になって始めて分った。怖い母ではあったが子供心にも尊敬を払っていたのは、お食事の時は父の次に必ず私のご飯を盛られた。お風呂は勿論一番先に父と入る。また寝ている時など、いかなる急な場合があろうとも私の枕元は絶対通らなかつた。着物でも脱ぎ捨てると母はずぐ人の歩かない所へ片付けられた。そして下に置いては出世が出来ないよと叱られた。

物心がついた頃には母と縁が薄かつたのか殆ど別れた生活であった。その間における両親の辿った道は正しく断崖の縁、茨の道であった。生死の境を彷徨された日が幾度もあったのである。人が望むような幸福な家庭生活は我等の過去には一日としてなかつたのである。しかし各々が一つの目的に向つて変つた面からそれに進む悦びは、労苦を超越した別な味があるものである。

今や祖母は逝かれて二十余年、両親は健やかに

して故郷の位牌を守っている。

私は大久保名物「金の玉」（※7頁に注）に根を下ろしてしまつた。あれを思いこれを考えては、運命の不可思議に今さらながら恐ろしくなるものがある。

「祖母が居ませば」と時々人間的な愚痴が出る。ああ自分はまた駄目だ。祖母の生命は決して一代で終つていない。久遠の過去から永劫の未来に流れているものだ。そして祖母の大使命は両親が受継ぎ、さらに自分がそれを継承しているのではないか。祖母の全生命は今自分の身に宿っているのだ。濟まなかつたと自ら反省する日もしばしばあったのである。継承者の悦びを自分の魂に語る時が、今世に於ける私の無上の幸福な時である。

想えば私の少年時代は体が弱く、郡山中学校も四條畷中学校も体格検査で不合格だった。この発表を見た瞬間、自分の前途に一つの光明も見出す事は出来なかつた。悲観の極みだった。仕方がない、画家の門人にでもなつて好きな道に生きようと仄かに決心がついた頃、母校の先生が受付十分前で漸く間に合つたと息を切つて家に来られた。

大阪の日新商業学校であった。もう私も腐つていたので一寸も嬉しくはなかつた。受験日には父と受持ち先生が付き添つて道々励ましたくれた。校医が薄恕一先生、校長は鹿島浩先生だった。薄先生（医師）が「この体格じゃ官公立ではとるまい、校長とつてやってくれ、学科は知らん」と大声で言われた。この瞬間が少年時代に於ける最も感激した最も嬉しかった時だった。書記さんかと思つたのが計らずも校長先生であったので全く意外だった。その時の悦び、この両先生に対する感謝の情は今も脈々として私の血潮の中を辿っている。（※4頁の林修三さんの「タニマチの人」参照。偶然にも、薄医師の紹介になりました）

この当時の私の家は経済的に最も苦境に置かれていたのであった。資本家の風が、我等の田舎にまで吹荒んで義理人情は薄く、旧家は祖先の面目を保たんと返って経済的没落へと転換していった。父は田地の大部分を売り払って、それを資本に大阪で商売を始め一攫千金を夢見たが、運命の戯れか七人の家族の中五人は枕を並べて病床に呻吟しなければならなかった。父は寝ずの看護、私は叔父の所へ託された。

そうした地獄の中に、私と妹は幸福に通学する身を置かれた。学費は残れる僅かの田畑を担保にした借金で当てられ、身を切るような悲痛な思いで勉強したものだ。私も決意した、金だ、金が欲しい。金が無ければ何にも出来ないのだ。呪うべきはこの浅ましき社会現状だ。自分は実業家になろう。先ず金を作って会社を興し資本家になって両親を先ず安心させたい。この意気に燃えて勉強した。商業関係の時間は実に楽しかった。高級自動車を通る度に振り返っては、「今に見ろ、自分も両親を乗せて走って見せるから」と微笑したものだ。

四年の春を迎えた。これは中学生には見られない現象である。友達が百貨店のショーウィンドウの前に立って、「あのネクタイが良い、この帽子はどう」とか、さも社会人らしき事を語り合っていた。自分もあと一ヶ年余りで社会人になるのだ。金を儲けるために一切の自分を殺して自分をだまして、さらに人を欺かなければならない。

自分が僅かの短い人生に於いて一流の資本家になった時は、自分は正しく物凄い吸血鬼になった時だ。どこに楽しみが見出せるであろう。千金を把むまでは楽しいであろう。物を通しての楽しみは一時的であって永久のものではない。永遠の楽しみに生きよう、こうして張切ってきた私の夢は

淡くもここに覚めたのであった。

物に囚われるから両親も苦しみ、自分も苦しむのだ。物を離れて永劫不変の楽しみを求めよう。そして清貧に甘んじよう、宗教だ、宗教的信念に生きる事だ。日蓮がある。日蓮の信念を杖にして自分は立とう。祖母の遺業たる金鶏発祥の霊地顯彰に不惜身命にて進もう。そして社会教化に挺身せん事を自分の魂に誓ったのである。この年の秋であった。両親に向って「上京したい、立正大学へ入学したい」。

突然の事だったので両親も当惑したが、自分の人生観の変わった事を懇々と語ったので、両親は悦んで承諾され激励して下さった。生れて始めて持つ壹百円、これを胸巻きの奥深く巻き込んで、大きな希望を抱きつつ独りで上京した時の心境を想えば、今に胸のつまる思いがするのである。

私は随分わがままであった。子供の時から親には一方ならずの苦勞を掛けた。ご両親は私のために過去の一切は犠牲にされた。そしてその強き清き正しき実践の総ては、皆私の血となり肉となり精神となつて今日、活躍の源泉となつて顕われているのである。祖母も他界からさぞ満足の微笑を漏らされている事と思われる。

……後略……

(漢字、かな遣いなどは現代風にしていきます)

※『法主矢追日聖年表』によると、昭和15年6月(満28歳)、「財団法人八紘会を買収し、大倭神宮は八紘会が奉斎することになり、矢追個人の神社を公的なものに切替えた」。東京大久保百人町のいわゆる「金の玉御殿」に八紘会の本部があり、そこへまだ隆家のお名前だった法主様が、家族と一緒に移り住んでおられた頃の文章です。前略部分によると町会役員をしておられたようです。

大倭会通信

この大倭会通信で皆さまに前向きな活動報告がなかなか出来なくて残念ですが、新型コロナウイルスはあい変わらず世界中で猛威をふるっています。この通信を書いている時点(2月2日)でも、日本でのオミクロン株の勢いは止まっています。このコロナ禍は人間社会に対する自然界からの大きな問いかけに違いありませんが、パニックにならずに事態を冷静に受けとめつつ日常生活を工夫しながら送っていきたいものです。

去る1月9日には大倭の大とんどの後に、久しぶりに禊会を再開し、初参加の方も含めて9名が参加し、それぞれの思いを語っていただき、和氣藹々の中にも真剣な話し合いを深めることが出来ました。次回からは、法主法話をまず皆で聞いて、それを話題にしつつ研鑽していこうということになりました。ところが、オミクロン株の拡大で2月の禊会はとりあえず再び中断という判断をせざるをえなくなり残念な思いをしています。

この時期には、毎年、その年の文化行事や文化講演会などの概要を発表してきましたが、現段階では昨年に引き続き、はっきりした計画が立てられない状況なのでご理解いただきたいと思えます。ただ担当者を中心にして文化行事や文化講演会の案を練っており、状況の変化を見すえながら対応していくことになると思います。世間ではネット環境を利用してのさまざまな活動が盛んになっていますが、大倭会でもそうした方向で考えていってもいいのではないかと声もあります。いつものようにコロナ禍が解消されていくか予断を許さない状況ですが、くれぐれもお元気で過ごして下さい。(岸田 哲)

あじさい日記

1月9日 午前9時半から西斎庭で晴天無風のなか大倭神宮の枯れ竹、正月飾り、昨年の祖霊祭経木等を火にあげる「おおとんど」神事が行われま



午後2時から拜殿で、令和2年5月の第616回以降中止されていた大倭会主催の祓会が再開されました(7頁大倭会通信参照)。

1月12日 奈良市三碓町の上田全宏さんが来邑。長曾根日子命について熱心に語られました。

1月14日 午前10時半から拜殿で大倭殖産(株)の事業関係グループ「安全衛生協力会」による安全祈願祭が行われました。

1月15日 大倭神宮月次祭。
1月19日 午後、拜殿のエレベーターの保守点検。

1月23日 大倭大本宮月次祭。お聞きしたのは昭和42年1月23日の月次祭法話。この日発行の『おおやまと』1月号に「本当の日本精神とは 一だらかにして和やか」として掲載分。

2月2日 昼から教務本庁で芝

香須弥・杉本志津女・山崎波留茂さん等が玉緒祭にお供えする「福豆」を煎りました。

2月3日 玉緒祭。この日は昭和40年2月3日の法話をお聞きしました。平成31年2月号『おおやまと』に「新しい気持ちで春を迎える行事」として掲載分。
2月6日 大倭神宮月次祭。

3匹目のアライグマが檻にかかっていた。習日が月曜で、辛い奈良市の回収日でした。
大倭安宿苑では

(菅原園)
1月1日 創立51周年記念日。
1月9日 希望者が大とんどに参加。炎に癒され、ぜんざいやフレンチトースト、焼き芋等で口祭りもしました。

(須加宮寮)
2月3日 節分行事。丸めた新聞を豆に見立て、鬼に扮した職員や住死者に投げました。

(長曾根寮)
1月10日 (特養) 書初め。大判イラストの絵馬に希望の文字を代筆。今年の幸運を祈りました。

1月15日 (デイ) 手作り松花堂弁当に、獅子舞踊り、ビンゴゲームで新年会を楽しみました。
(茂毛菴園)
1月7日 昼食時に創作料理(お寿司)で新年のお祝いをしました。

(八重垣園)
1月11日 午後、食堂でお抹茶と花びら餅で初釜をしました。

こぼれずみ

▼広島県大崎上島町 中本好子
以前から空や雲、星を見るのが好きで、国際宇宙ステーションISSきぼうも見たいと思っていた。その日何気なく聞いていたラジオから「今日は広島島の夜空から国際宇宙ステーションがよく見えます」と！ 予定時刻も言っていた。

静かな夜の海のそばで時計を見ながら待つ。予定時刻はぼびつたりと忽然と木星並みの明るさで、西から現れ北の方向に去って行った。感激して思わず手を振っていた。あつと言う間だったが、自分の中では、長く余韻が残っていた。地上約400km上空を1周約90分のスピードで、地球を回っている。日時・晴天の夜という条件が合えば、都市部のマンションのベランダからも肉眼で可視できるようです。「きぼう」その名のように地球に希望を届けて欲しい。

▼あじさい邑 松本ト
屋久島在住、山尾春美さんからの「愚角庵だより」に感動したので皆様に一部おすそわけです。

《幼かった子ども達をお風呂に入れるあわたしい日々のある夜、私が父親と一緒にうたっていた、お風呂からあがる時の歌を思い出し、三省さんに話したことがあります。1から10

まで数えるのですが、もう少し温まらせた時に、父親は続けて「おまけのおまけの汽車ぼっぽ、ぼおっぼおっぼあがりましょ。今日は日もよし、明日も日もよし、にてが、あがりそめた、あがりそめた」と歌うのです。

いつも不思議に思っていた「にてが、にて何だろうね」と三省さんに尋ねると、三省さんは少し間をおいて「そりゃあ、日天月天だろう」と答えました。三省さんの直観力に感動しました。まだ人々の心の中にお日さまや月・星がめぐる天空・時空がはつきりとイメージされていた頃、天のめぐみの中で生まれ死んでいくことの有難さを実感していた人々の時代が思われました。すこやかでポジティブな人生賛歌、宇宙賛歌ではないかと、改めて思っています。》

▼あじさい邑 中村千久佐
今年の年賀状に今回を最後に差し控えさせて頂く旨を記載したら、主人の長崎の実家から「何処か具合が悪いの？」かと連絡があり、私が「主人が亡くなった年齢と同じ年になったらと決めていたので」と伝えた日は、奇しくも主人の四回目の命日でした。

姉が誕生日プレゼントと共にくれたメッセージ「元気で体にくるつくて頑張りましょう。毎日楽しくその日一日一日を充実

した日になるように……」主人を亡くして以来、叱咤激励をしてくれる。一時はどうなるかと思った時期もあったが、母に姉弟、そして大倭の人達のお陰と感謝しながら何とか元気に過ごすことが出来ている。

編集後記

▼今年も表紙写真を募集していきます！ 1月号では、はじめ坂田洋美から花柳鶴寿賀さんの写真の推薦があつて連絡中に、鶴寿賀さんが脳梗塞で入院、リハビリ中ということが分かりました。すぐに今度は永飯まゆりさんがご主人の大江強さんと連絡をとってリレいでご協力頂きました。▼投稿もどうぞ。今回の「こぼれずみ」は、文字起こしや発送など編集部縁の下での力持ちの皆さんに「何か書いて」とお願いしました。(春

あんない

*月次祭(大倭神宮)
3月6日(日) 午後2時より大倭神宮にて。
*大倭会主催祓会
3月13日(日) 中止とします。
*月次祭(大倭神宮)
3月15日(火) 午後2時より大倭神宮にて。
*月次祭(大本宮)
3月23日(水) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。